
《ソードアート・オンライン》-転生した主神(笑)-

BRISINGR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

《ソードアート・オンライン》 - 転生した主神（笑） -

【Nコード】

N9752Z

【作者名】

BRISINGER

【あらすじ】

《はじまりの街》で茅場晶彦が《SAO》のデスゲーム開始を宣言した。1万人のプレイヤーの1人である俺、デイン（偽名）は転生者だ。原作知識もある。あと、エクストラスキルも持ってる。とりあえず、死なないように生きていきたい。

1 1 デスゲーム、開始（前書き）

思い付きで書き始めた作品です。
よろしくお願ひします。

1 1 デスゲーム、開始

突然だが、ここはどこだ？。

いや、だって、昨日、普通にベッドで寝てて、目が覚めたら知らないところにいるんだからな。

周囲を確認。

たくさん建物がある。どこかの街なのかな？そして、俺がいる場所はその街の広場みたいなところ。

人もいる。それも全員美形、男女問わずだ。見たところ、不細工なやつなんて1人としていない。金髪、青髪、赤髪、黒髪、等々と色々な髪の種類がある。全員、似合ってるし。

正直なところ、凄いムカつく。これは、平凡（だと思いたい）な俺に喧嘩を売ってるのか。

いやいや、待て待て。

それよりも現状把握だ。とにかく、ここがどこかが先決だ。

ってか、人、多くないか？広場だったのに人口密度が高い。肩と肩をぶつけるほどではないが、それに近いものがある。

「クソっ！何でログアウトできないんだよ！」

ふと見ると、斜め前にいる青髪の青年（もちろん、美形）が空中に浮かぶ紫色の板に指で連打していた。その板には何も書いていないのだ。

あの紫色の板は何？それに、ログアウト？

「どうなってんだ？」

「アナウンス無しの転移テレポートなんて珍しいな。何かのバグか？」

「早くログアウトさせてくれよ！」

「状況を説明しろ！」

周りに喧騒が広がっていく。罵声も聞こえてきた。俺には何がどうなってんのか分からない。

「あつ……上を見る！」

喧騒よりも大きな声が誰かが叫んだ。

俺はもちろん周りの人も声に従って、反射的に視線を上に向けた。

上空100m辺りの天井を（今更だが何で天井があるんだ、ここは外だろ）真紅で染められた2つの英文が交互に現れ市松模様に染め上げた。

【Warning】

【System Announcement】

え、英語？ここって異世界じゃないの？

俺が驚いている傍で広場のざわめきが治まっていく。何でみんな安堵の表情浮かべてんの？明らかにおかしいでしょ？訳が分からない。さっきの紫色の板といい、上空に浮かんでいる英語といい、どうやって浮かんでんだって話だ。

不思議な現象はそれだけで終わらなかった。

隙間なく埋める真紅に染められた天井の中央部分から、どろーりと真つ赤な液体が落ちてきた。ゆっくり落ちてくる液体は、空中でその形を変えた。

この世界は重力というもの知らないのだろうか、と俺は真剣に真面目にそう思った。

形を変えた液体は、身長20mくらいの真紅のフード付きのローブを着た巨人の姿になった。

もう俺は驚かない。

例え、目の前にいる巨人に顔が無くてもだ。

「ありや、ゲームマスターGMじゃねえか？」

「何で顔が見えないの？」

「気持ち悪い」

そんな囁きが周りから聞こえてくる。

不意に、巨人のローブの右袖が動いた。左袖もゆっくり掲げられた。左右のローブから純白の手袋が俺の上で広げられた。

ところでさ、俺、どっかであの巨人見たことがあると思うんだ。どこだっけな？

『プレイヤーの諸君、私の世界へようこそ』

誰が喋ったのか分からなかった。でも、状況を察するに目の前にい

る巨人が喋ったのだらう。
ああ、顔無しの巨人、口が無いのにどうやって喋ったのか教えてくれ。

『私の名前は茅場晶彦^{かやばあきじこ}。今やこの世界をコントロールできる唯一の人間だ』

その言葉に俺は脳天から雷を受けるような衝撃を受けた。

マジ！？今、何て言った！？

茅場晶彦！？

ああ！思い出した！あの巨人のローブ姿は文庫の挿絵じゃん。だから、見たことがあったのか、うんうん。

つて、そんな頷いている場合じゃねー！

もう状況は理解したたぞ。

ここは《SAO》の世界だ。そして、俺がいる場所は第1層にある《はじまりの街》の広場。

だから、みんな、ログアウトとかGM^{ゲームマスター}とか言ってたんだな。

………うわー！恥ずかしい！

今までの状況にツツコンでた自分が恥ずかしい！

この世界は重力を知らない？

馬鹿！ここは電腦世界なんだから何でもアリなんだよ。

『プレイヤー諸君は、既にメインメニューからログアウトボタンが消滅していることを気付いていると思う。しかしゲームの不具合ではない。繰り返す。これは不具合ではなく、《SAO》本来の仕様である』

ここから長々と説明が始まるが、俺は知っているので聞き流すことにした。

つまり、あれだろ？

自発的なログアウトはできない、外部からのナーウギアの停止は不可能。もし、外部からナーウギアの取り外しがやられた場合は、えっと………脳に電気を流す？

『 ナーウギアの信号素子が発する高出力マイクロウェーブが、諸君の脳を破壊し、生命活動を停止させる』

そうそう、それ。

次に、HPが0になったときは現実世界にある自分の脳がナーウギアによって破壊。つまり、死亡。

あとは、ずっと家で寝たきりって訳には行かないから、病院に搬送される時間を考慮して2時間の猶予時間がある。

現実世界にある俺の身体、大丈夫だよな？ちゃんと、病院に搬送されてるよな？

いや、でも俺もう明らかに転生者だからな。現実世界に肉体があるのかも怪しいぞ。アバターに憑依ってか？勘弁してくれ。

最後に、俺たちプレイヤーが現実世界に戻るための条件は1つ。アインクラッド最上層、第100層の《紅玉宮》のラスボスであるヒースクリフを倒すこと。

まだ茅場晶彦の説明が続いている中、俺は呆然と上を見る人混みを抜け、広場から出た。

とりあえず、俺が1番乗りで動いているのは間違いない。他の人は突き付けられた現実を整理中だからな。

とは、言っても、他のプレイヤーみたいに俺にはあまりアドバンテージは無い。

原作知識があるとは言え、戦闘経験は皆無。キリトみたいに剣道の経験があるわけでもないから、死ぬときは死ぬ。それに、原作知識はデスゲーム開始から2年後の話だ。今の時点であまり役立つとは言えない。

そっぴや、キリトと接触するか？まだ、あの人混みの中だよな。

うーん、まあ、いいや。原作キャラとの接触はまたの機会にするかとはいえず、確定事項は、リズベットの店とエギルの店の常連客になるう、うん。

原作キャラとは、仲良くしたいし。せめて、現実世界でエギルの店に呼ばれるくらいにはなりたい。

あーっと、そうだ。

俺は空中で指を振り、紫色の板であるウィンドウを呼び出した。

俺ってば、自分のアバターの名前も知らないんだよな。もちろん、ウィンドウのメインメニューには自分の名前が映し出されていた。ちゃんと、他人に見られないように不可視状態にしてある。

Odin。

オーディン。

誰だ！こんな厨二病の名前をつけた奴は！俺は神じゃねえぞ、ゴラ！！

肩で息をしつつ、次にアイテム欄を確認……………バリバリの初心者でした。まあ、当たり前。

スキルの方はと……………何これ？俺が目を見張ったのは、レベルアップによって習得可能スキルが増える《スキルスロット》の欄にある1つの枠。

まだレベル1だから1つしかないと思っていたのだが2つあった。これはいい。1つは、初心者装備である片手剣を持っているためなのか、片手直剣スキルが埋まっている。そして、もう1つが、

これ、エクストラスキルなんじゃね？

全10種しかないエクストラスキルだ。

名前だけでエクストラスキルと分かるのか、と言われれば微妙だ。でも、このスキルの名前からしてエクストラスキルと判断してもいいんではないだろうか。あまり自信は無いけど。

とにかく、このスキルは外せない。

何であるかなんて知らない。よくあるテンプレのチートのような気もするが、使えるものは使おう。

まずは、武器屋だ。今、持っている片手剣を売って『あの武器』を購入しよう。そしたら、片手直剣スキルを消して、代わりに『あの武器』のスキルを入れる。

《スキルスロット》は2つしか無いんだ、無駄なスキルは入れられない。

『それでは、最後に、諸君にとってこの世界が唯一の現実であるという証拠を見せよう。諸君のアイテムストレージに、私からのプレゼントが用意してある。確認してくれ給え』

広場の外まで聞こえる茅場晶彦の声。もう説明は終盤に差し掛かっている。

ウィンドウを《スキルスロット》からアイテム欄に変えて、所持品リストの1番上にある手鏡をオブジェクト化させた。

この手鏡を使わなかったら、現実世界の顔には戻らず、ずっとイケメンの顔なのだろうか、と一瞬の期待が過ぎ^よったが、手鏡に映る自分を見て淡い期待であると痛感した。

自分と同じ顔……………！

つまり、手鏡をやるまでもなく、俺は現実と同じ顔なのだ。今の今まで周リイケメンなのに、俺だけ平凡だったのか。泣きたくなくなってきた。

突然、光が俺を呑み込み、視界がホワイトアウトした。2、3秒後に光は消えて、手鏡に映るのは、さっきとあまり変わらない自分の顔。手鏡を地面に落として壊し、手鏡をアイテム欄から消す。

広場からざわめきが聞こえてくる。アバターが現実世界の自分と同じ顔になったから、驚いているのだろう。

俺はそれらの喧騒に背を向けて、近くにあるNPCが経営する武器屋へと入った。

『……………以上で、《SAO》正式サービスのチュートリアルを終了する。プレイヤー諸君の 健闘を祈る』

1 2 赤鼻のトナカイ(裏)

デスゲーム開始から5ヶ月が過ぎたけど、俺はまだ生きています。今やキリトと同じくソロの攻略組プレイヤーとして頑張ってる。

今の最前線はまだ第50層より全然下の層のため、エギルの店やリズベットの店はまだ無い。シリカには接触してはみたが、俺より会った前の野郎共のせいで少し男嫌いになってしまったみたいで、あまり話せなかった。残念。

ところで、俺のフレンドリストには誰1人として名前が載っていない。この『オーデイン』という名前のせいだ。恥ずかし過ぎる。とりあえず、攻略メンバーやキリトには『デイン』と名乗ってごまかしている。

プレイヤー間のアイテム交換は全部避けている。互いのプレイヤー名が映るからだ。買い物はNPCのいる店で済ましている。どうしてもやらなくてはいけないときは、俺は1回オブジェクト化させて目の前で交換するようにしている。お金も然り。

お金をオブジェクト化ってかなり危なっかしいんだよね。プレイヤーならその場で奪って、敏捷力にものを言わせて逃走なんてこともできる訳だからな。

閑話休題。

今は2023年4月。

キリトがギルド《月夜の黒猫団》に入る月だ。

俺はサチを救う。

理由？可愛い女の子が死ぬと分かっているのに、黙って見過ごせる

か馬鹿め！

……コホンツ、失礼。

とにかく、俺はサチを救いたい。ついでに他のメンバーも救えることなら救う。

当然のことながら、ヒロイン優先だ。

でも、俺は原作崩壊をあまりしたくはない。原作崩壊させて取り返しの付かないことになったら嫌だからな。よくあるパターンだと、原作キャラが死ぬとかヒロインが主人公ではなく自分を好きになるとかか。

原作だと、サチもキリトを好いていた節があるから、ここはキリトのハーレムメンバーになってもらおう。

唯一気掛かりなのが、死んだサチのために、『背教者ニコラス』を倒し蘇生アイテムを手に入れること。その過程でキリトががむしゃらにレベル上げをするのだが、人の命が懸かっているのだから、背に腹は変えられない。

『影ながら援護して、サチはキリトが守りましたよ作戦』

これが俺の作戦名である。作戦名に関してはあまり突っ込まないで欲しい。

問題は、いつキリトが『月夜の黒猫団』に入るか。そして、その『月夜の黒猫団』がどの階層を狩場に行っているかだ。

1番簡単なのは、サチが死ぬ場所である最前線のいくつか下の層にある迷宮区で待ち構えることなのだが……そう。いくつか下なのだ。つまり、覚えていない。この案は没。

次の手として、キリトが武器の素材の収集で下の階層　つまり

『月夜の黒猫団』がいる階層に行くときに一緒に一緒について行くことだが、これは難しい。キリトは基本ソロで動くため、一緒に動くのは

断られるかもしれない。追跡するにしても、いつ下の階層に行くか分からないので、パス。

え？メッセージを送ればいいじゃないかって？それをしたら、キリトが怪しんで行かないかもしれないし、時期がズレて《月夜の黒猫団》に会わない可能性も出てくる。それこそ、原作崩壊だ。

そもそも、俺はキリトにメッセージを送れない。メッセージを送るには、互いにフレンドリストに名前を登録しなければならぬからだ。オーディンなんて名前を知られたくないし、恥ずかし過ぎる。でも、キリトくらいなら知られてもいいかな、今日この頃。
一応、同じソロの攻略組だから仲は良いんだけどな。

閑話休題。

結論。

《月夜の黒猫団》を捜し出して、監視と追跡が有効。

調べてみたら、総合掲示板に『ギルド《月夜の黒猫団》、前衛募集中』と書いてあって、あっさりと《月夜の黒猫団》の所在地が分かった。

そこからは、監視あるのみだ。とは言っても、夕方の転移門を少し監視するだけで済む。この時間に、キリトは《月夜の黒猫団》と一緒に迷宮区から入ってくるからだ。

俺は拠点をこの階層に移して（宿屋にチェクインするだけだが）監視を続けた。宿屋は窓から転移門が見える場所にした。

うん。サチがいることを確認っと。

あれから十数日。

俺は夕方を除いた、朝に低層フロアで武器の素材集めして、昼と夜にレベル上げをしている。自分がレベルホリックになっているのは重々承知しているが、この世界においてデメリットになるわけでもないので、ひたすらレベル上げをしている。

攻略組のメンバーのレベルがどこまで行っているのか知らないが、いいところまで行っているとは自負している。

デスゲーム初日に気付いたエクストラスキルらしきスキルも順調に熟練度を上げている。まだ誰にも見せてはいない。

いつ人前で使うかは決めてはいないが、キリトと1対1で戦うときにでも使おうかとか、グリーンアイズの時とか、適当に考えている。

おおつと来た！

キリトが《月夜の黒猫団》と一緒に歩いている。そのまま、酒場まで行くようだ。

よし、作戦開始だ。

そこからは、キリトと《月夜の黒猫団》を監視と追跡。

ああ、もうストーリーカー行為みたいになってるけど、読者の皆さん許して下さい。ヒロインを守るためなんです。

新たに浮上した問題が、いつ『その日』が来るか。こればかりはどうしようも無いので監視と追跡を続けるしかなかった。

迷宮区の追跡は困難を極めた。キリトは索敵スキルを持っているので、俺の索敵スキルの索敵可能範囲ギリギリ内側に入るようにしなければならなかった。近すぎても、キリトの索敵可能範囲に入り、遠すぎても俺の索敵可能範囲外に出してしまう。もし、俺よりキリトの索敵可能範囲が広い可能性もあるのだが、その時はその時である。2、3日過ぎたあたりで、いきなりキリトと思わしきプレイヤーが物凄いスピードで俺に向かって走ってきたことがあった。もちろん、俺はその場でUターンして全速力で逃げた。あれは本気で焦った。

そして、遂にキリトと《月夜の黒猫団》が酒場に行っていると、盗み聞きした話だと、ギルド資金がそろそろギルドハウス向けの一軒家を買えるくらいになるとのことだった。

『その日』が来るのは近い。

やっと『その日』が来た。

いつもの酒場で《月夜の黒猫団》のリーダーであるケイタがギルド資金を持って、不動産仲介プレイヤーのところに行った。酒場に残ったキリトと《月夜の黒猫団》のメンバーは、ケイタが帰ってくる前に迷宮区で金を稼いで、新しい家具を全部買い揃えようという話になった。

転移門に向かうキリトと《月夜の黒猫団》のメンバーたち。俺も自

然を装いながら転移門に行く。

キリトが階層の名前を言うと、キリトを含めた《月夜の黒猫団》が全員転移した。

俺も傍で階層の名前を聞いていたため、最前線から3つ下かーと思いつつ、その階層の名前を言って転移した。

さて、キリトたちを見失った。

迷宮区に入ったまでは良かったのだが、実はこの階層に入るのは初めてなのだ。

初めて入る階層に多少の緊張を覚えながらも、足を進めた。キリトたちを見失わないように一定の距離を保って歩いていると、

ガチャコン！

いきなり足を乗せた床の石が沈んで、何か不吉な音が鳴った。

マズい！と思った俺は身構える間もなく、視界が真っ白になった。

2秒後に視界が開けた。何が起きたのかは飛び込んでくる風景を見れば分かった。

ランダム系強制転移トラップ。

迷宮区にあるトラップで、このトラップに引っ掛かったプレイヤーを迷宮区の何処かに強制転移させるトラップだ。転移する場所は、迷宮区の入口だったり、はたまた迷宮区の奥地だったりと色々だ。

たまに、瀕死なプレイヤーが迷宮区の入口に転移することを願ってわざと引っ掛かることもあるのだが………っと、こんな話をしていない場合ではない。

早くキリトたちを捜さなくちゃ。

一応、HPバーを確認したが減った様子はない。

その時。

アラームトラップの音が鳴り響くのが聞こえた。

キリトたちが引っ掛かったのだ。

すぐに、悟った俺は音の鳴る方向へ全速力で駆け出した。

右に左に右に………いくつも角を曲がりながら辿り着いた先にはモンスターが波がこつた返していた。アラームトラップがけたたましく鳴っていて、キリトが上位ソードスキルを必死に振るいモンスターを蹴散らしていく。それでも《月夜の黒猫団》のメンバーは守ることはできない。

残っているのはキリトとサチの2人だけ。他のメンバーは死んだのだらう。

モンスターの数が多過ぎるのだ。さすがの俺でも命の危機を感じた。

でも、それでもサチは救う。

1度決めたことだ。最後までやり通す。

俺は左手に持ったアイアンランスを目一杯の力を込めて、サチの目の前にいるモンスターに向かって投げた。

貫通直射投槍技《レボープ・ニードル》。投げた槍を回転させて貫通力を増させるスキルだ。

投槍スキルは、その名の通り、槍を投げるスキルだ。槍を扱っていれば、自然と出てくるスキルなのだが、かなり不評だ。槍は他の武器と比べて耐久力が低い、相当丈夫に加工した槍でもない限り投げた槍はモンスターを突き刺さった瞬間、もしくは貫いた瞬間に耐久力を持っていかれて、ポリゴンへと霧散してしまう。もし、投げで

耐えられる槍でも、投げた槍が勝手に手元に戻ってくるなどある訳ないので、自分で拾いに行くしかない。モンスターが闊歩するフィールドの中をだ。危険過ぎるだろう。このデスゲームにおいて、かなり致命的な欠陥スキルとも言える。とは言っても、俺が使用しているわけだが。

投槍スキルは投剣スキルとは違い、敏捷力の他に筋力値も関係してくる難儀なスキルだが、ものは使い用だ。

ちなみに、投槍スキルと投剣スキルの違いは投げるオブジェクトの長さで決まる。1m50cm以上だと投槍スキルで、1m50未満だと投剣スキルとなる。消耗品である投擲用ピックが使えないのも不人気の原因の1つだろう。

投げたアイアンランスは回転しながら、30m先にいるサチに襲い掛かるうとするモンスターを3体一気に串刺しにしてモンスターと一緒にポリゴンと化した。耐久力が槍の中で低い方なので、霧散することは承知。

サチは目の前でモンスターが消え失せたのにビックリして顔を固まらせているが、キリトに手を引っ張られて、キリトの背に庇うように移動された。うん、終わるまでずっとその姿勢でいてくれ。万が一、投げた槍が当たる訳にはいかなからな。

俺はアイアンランスを左手で投げた傍らで、右手でウィンドウを呼び出し新たにアイアンランスを左手にオブジェクト化させた。それをまた投げる。

キリトもバツサバツサとモンスターを俺以上のペースで屠っている………って当たり前か。

それから、俺は20本のアイアンランスを失いながらも、モンスターを全て片付けた。気付いたときには、アラームトラップも止まっていた。

サチは緊張の糸が切れて安堵したのか、キリトに抱き着いて泣き始

めてしまった。キリトは苦笑いしながら、自分の腕の中で泣くサチの頭を撫でている。

その光景に少なからず憎しみを覚えたが、自分が望んでやった結果だ。まあ、いいだろう。

キリトの目が不意にこちらを向いた。

ヤベ！飛んでくる槍の方向から感づいたのか。

こっちに視線が向く前に、俺はまた敏捷力全開にして来た道を駆け出した。

とりあえず、見られても大丈夫なように白い仮面と黒色のフード付きのローブを着てたから気付かれてはいないと思う。

投槍スキルを使うプレイヤーは珍しいが、常日頃から使っているわけでもないの俺だと特定される心配はない。というか、この日のために秘匿にしてきたのだ。気付かれるわけがない。

とにかく、洞察力の高いキリトに気付かれることはないし、サチは助けた。

作戦、終了。

お疲れ様でした。

1 2 赤鼻のトナカイ(表) (前書き)

明けましておめでとございます。
今年もよろしく願います。

キリト視点です。

1 2 赤鼻のトナカイ(表)

俺が《月夜の黒猫団》に入ってから、迷宮区を歩くときに誰かの視線があるのは感じていた。

所謂、第六感つてやつなのだが索敵スキルをやってみると、案の定1人のプレイヤーが俺の索敵可能範囲ギリギリのところを出たり入ったりしていた。自分の索敵可能範囲をギリギリのラインのところ俺たちを収めようとしているのだろう。だとしたら、こいつは索敵スキルの熟練度がほぼ俺と同等だ。

この行為は、俺を攻略組プレイヤーと知りながらの警戒する行動か、それとも、ただ単に用心深いだけなのかは分からない。

どちらにしる、人を尾行しているのだから、何か企んでいる間違いないだろう。

PKプレイヤーキルをするにしても、あつちは1人。こっちは俺を含めて6人だ。負ける気はしない。

本当なら、他のメンバーにも話して警戒してもらいたかったのだが、今の俺は皆よりちよっとレベルが上のプレイヤーということになっているので、話すに話せなかった。

最初の2、3日はPKプレイヤーキルの線で考えていたのだが、それを過ぎてからはPKプレイヤーキルという考えは捨てた。例えばそれが目的だとしても時間をかけすぎだ。普通は1、2日で決行する。

4日目にサチたちがアイテムの採集に気を取られている間に、索敵可能範囲ギリギリにいる尾行者に向かって全力で走った。

その面を拝ませてもらおうか、と思ったのだが、予想以上に尾行者の敏捷力は速かった。たぶん、俺と同等かそれ以上だ。結局、距離の差は縮められずにサチのところに戻ると、

「急にいなくなるから、心配しちゃったよ？どうしたの？」

「なんでもない。ちょっと珍しいモンスターを見かけたから、追いかけてただけだよ」

蝶々を追いかける少女を少し捻ったような解答をした。

それから尾行者は俺たちのことを尾行し続けた。何かをするわけでもない。ただ、索敵可能範囲のギリギリのところにいるだけ。

新車のストーカーか。

考えられるのはそれだけだった。だとしたら、誰が目的なのだろうか。尾行者が男か女かかも分からないため、《月夜の黒猫団》の全員が候補に挙げられる。

待てよ。俺が《月夜の黒猫団》に入ったときに、尾行者が現れたのなら、俺が対象ということも考えられる。いや、待て待て。たまたま、俺が索敵スキルを高かったせいで、これまで尾行してた奴に気付いただけなのかもしれない。

色々と可能性はあるが、ここは様子見ということにしておこう。

サチが宿屋から消えた。

ギルドメンバーを総動員で捜し回った。俺の頭の中には、もし、サチが1人で《圏外》に出ていたら、尾行者に襲われるかもしれないという一抹の不安があった。その後、索敵スキルから派生する上位スキルの追跡スキルで、すぐにサチの居場所が主街区の外れだと分かり、安堵した。主街区の外れは《圏内》なのでPKプレイヤーされる心配は

ない。

この翌日の夜から、サチは俺の部屋に来るようになった。俺の近くで、君を死なない、という言葉や聞くとうとうにか眠れるのだと言った。俺はサチのためにその言葉を紡いだ。

それから1ヶ月もしない内に大事件が起きた。それは、ギルド資金が目標の金額に届き、ギルドリーダーのケイタが不動産仲介プレイヤーのところに行っている間のことだった。

ケイタを除いた《月夜の黒猫団》のメンバーが話し合い、ケイタが戻ってくるまでに新しいギルドハウスの家具一式揃えてしまおう、ということになった。最前線からわずか3層下の迷宮区で戦うことになった。そこはトラップ多発地帯でもあった。

1時間ほどで目標金額に届いて、さっさと戻って買い物しよう、という時になって、シーフ役のメンバーが宝箱を見つけた。俺は放置することを主張したが、受け入れてもらえず、アラームトラップが発動した。

3つあった部屋の入口からモンスターの波が押し寄せてきた。緊急脱出しようにも、ここはクリスタル無効エリアに指定されていて、俺を含む全員がパニック状態に陥った。最初に死んだのは、シーフ。次に、メイサーのテツオ、それに続いて、槍使いが死んだ。

俺は完全に恐慌状態し、無我夢中で上位ソードスキルを繰り出してモンスターを倒し続けた。俺がモンスターに上位ソードスキルを放っているところで、サチがモンスターの波に吞まれようとしていた。助ける余裕はない。

その時、視界の端から銀色に光る槍が飛び込んできた。その槍はサチの目の前にいるモンスターを何体か串刺しにした。俺はその一瞬

の間で、敏捷力をフルにして、呆然とするサチの手を引つ張り背中側に移動させた。これで、俺がモンスターに倒されない限りサチが死ぬことはない。そこからは、俺のソードスキルと謎の銀の槍がモンスターを駆逐していった。

ようやく、モンスターの波が止まったとき、俺は肩の力が抜けてしまった。HPバーは半分以上は残っている。サチも、安堵からなのか、俺の腕の中に飛び込んできて泣き始めてしまった。これまで女子に腕の中で泣かれる状況シチュエーションがあつたことがなかった俺は内心ドキマギしながらサチを慰め続けた。

ふと銀の槍のことを思い出し、槍が飛来してきた方向に顔を向けてみると、慌てるように立ち去る黒いローブの背中が見えた。追いかけていた気持ちはあつたが、腕の中にいるサチを放り出すわけにはいかないのです、その気持ちを沈めた。

サチはまだ泣き続けていた。

俺とサチはクリスタルで主街区に帰り、宿屋で待つケイタのところに行った。俺が事情を説明しようとすると、意外にもサチがこの役を買って出た。だが、どうやって俺のことを説明するのかと思つたら、サチが俺のことを高レベルのプレイヤーであることを知つていたらしい。後から聞いた話だと、一緒のベッドにいるときに後ろから俺のウィンドウを覗いてしまったらしい。サチの説明に俺はビーターであることを付け加えさせてもらった。

説明の終わった後、ケイタは、

「ビーターのお前が、僕たちに関わる資格なんてなかったんだ」

ただ、一言そう言った。

その言葉が俺の胸に突き刺さった。確かに、俺が関わりさえしなければ《月夜の黒猫団》はずっと安全なミドルゾーンに留まり、無茶なトラップ解除に手を出したりすることもなかっただろう。だから、俺があの人を殺したことに。

「そんなこと無い！」

サチが叫んだ。

あの気弱なサチが叫んでいる。ケイタも面食らったような顔をした。

「キリトは言ったよ。このトラップを放置しようって。それを聞き入れなかった私たちが悪いの」

「だから、何だと言うんだ。キリトが関わったせいで3人が死んだことに変わらないだろう」

「キリトは、トラップに引っ掛かったときも私を守ってくれた。キリトのおかげで、私は生きてるの。だから、キリト1人のせいにしてないで」

苦虫を潰すような顔でサチの言葉を聞いたケイタは俺の方に向き直った。

「キリト、俺はお前のことを許しはしない。これ以降、2度と俺の前に現れるな」

「……………分かった」

俺は踵を返して宿屋を出て行った。

「キリト」

後ろからサチの声がかかった。

俺はその場で立ち止まった。背中越しでもサチが泣きそうなのが分かる。

「サチ、心配してくれてありがとう。君のおかげで俺の『罪』が少しは晴れてきたような気がするよ」

「うんうん。『罪』なんかじゃないよ。キリトは私のことを

」

「それは過程の話だ。結果的に俺の慢心のせいでのギルドメンバーは死んだんだ。君たちと初めて会ったときに、俺が嘘を付かなければ、こんなことにならなかった」

「初めて会った時、キリトがポーションが少ないから……」

「それが嘘なんだ。ポーションはまだあったから、君たちと一緒に行動する必要はなかった」

俺は何を言っているのだろう。

こんなこと言えば、サチが傷付くのは分かっていることだ。

俺の懺悔みたいなものなのか。

「俺はソロプレイヤーとして、積み上げたステータスで、俺より弱い君たちを守って、頼られたかったんだ。その快感のためだけに俺は《月夜の黒猫団》に入ったんだ」

驚いているのだろう。失望しているのだろう。そんな気持ちでギルドに入り、結果、仲間を失わせることになったのだ。

だが、サチから出てきた言葉は予想外のものだった。

「その気持ちを快感って言ったけど、良く言えば、人助けだよな。キリトの中には私を、私たちを守ってあげたいという気持ちがあった。その気持ちがあったから、私たちを守ってくれた。それに変わりはない。そんな気持ちが無くちゃ、初めて会ったときに、守ってくれなかったよね」

まだサチの言葉が続いた。

「だからね、キリト。私は感謝してるんだ。キリトがその気持ちを悪いものだと言うなら、私は何度だって否定するよ。だって、私はその気持ちに救われたんだもの」

俺の目から涙が零れる。この涙は『罪』なのか分からなかったが、俺の気持ちが晴れていくのだけは分かった。

俺がサチを救ったように、サチも俺を救ったのだ。

「ありがとう、キリト。私は君に会えて良かったよ」

サチの感謝の言葉が、俺の胸に染み込んだ。

1 3 第50層へアルゲード到達

サチを助けてから時は経ち、今は2024年の1月だ。先月の下旬から今月の中旬にかけて、第49層は突破されて、最前線は第50層《アルゲード》となった。

確か、第50層はボスは金属製の仏像じみた多腕型のモンスターだ。そのボスの猛攻に怯んだプレイヤーは勝手に緊急脱出し、戦力が減ったことで死者は増え、またそれに怯んだプレイヤーが勝手に緊急脱出、……という悪循環に陥り、戦線は一時崩壊した。その後援護の部隊が駆け付けボスは撃破したが、死者が多数で攻略は遅れることになった。ヒースクリフはこの戦線を独力で支えたらしい。これが、ヒースクリフを《SAO》最強の男と呼ばれるきっかけとなる。

第50層の攻略関連で言えば、このくらいだろう。そついや、もう少しでボス部屋までマッピングが終わるとかなんとか。

近況報告、その1。

第50層に行けることになったことで、エギルがついに店を開店。アルゲードは建物という建物が入り組み、町並みはキリトの言う通り猥雑。その中から1つの店を探すのは困難を極めると思ったのだが、案外いい場所を買取ったらしく、エギルの店は転移門のある中央広場から西に伸びた目抜き通りを数分歩いたところにある。

ぐに見つかった。

見つけた俺は中に入りモンスターの素材を売ろうと思った。さて、ぼつくられるのかと思いきやお客様第1号というわけで、割り増しで買い取ってもらえた。最初は多少の高値で買い取り好印象を与え、後でぼつたくる作戦か。

商人エギル、恐るべし！

エギルとの商談はアイテムトレードを使って行った。エギルの店を鼻肩するつもりだったので、開き直ったのだ。ただ、俺の名前を見て噴かれたときは容赦なく槍で顔面目掛けてソードスキルをぶっ放してやった。もちろん《圈内》だったのでエギルのHPが減ることはない。

ただ、プレイヤー間のアイテムトレードは初めてだったので、操作ミスを連発してしまい、

「なあ、おめえ、初心者プレイヤーか？」

「悪いね。アイテムトレードもまともにできないプレイヤーで」

と返しといた。全く以てカッコ悪い。

何とかアイテムトレードで済ませて、店を後にした。

リズベットのの方は、1度も会ってないが、せつせと店を開店するために資金を集めている頃だろう。

近況報告、その2。

えっと……二つ名が付きました。

《孤高の槍使い》

……まあ《閃光》よりはマシかと。

程度で言ったら《黒の剣士》くらいかな。

なぜ、この二つ名が付いたのかと言うと、ソロで動いていたのもあるけど、1番の要因は、誰1人としてフレンドリストに俺の名前が載ってないということ。

ゆえに《孤高》。

異名が付けられた経緯は、攻略組ご用達の酒場から始まった。

「おい、デインの奴、見なかったか？」

「いや、知らないな」

「俺も知らないな。ってか、アイツに何の用なんだ？」

「俺のギルドに勧誘する」

「まあ、確かに、アイツは強いけど、ソロだぞ？そんな易々と勧誘できるものなのか？」

「ハッ。そこは待遇付きで勧誘するんだよ。そうすれば、奴だつて入ってくれるはずさ」

「そんなものか？」

「そんなもんなんだつて。これでウチのギルドも戦力アップのはずだ」

「結局は、そこかよ」

「うるせっ。ところで、おめえ、デインの奴にメッセージ送ってくれないか？」

「俺のフレンドリストにはデインは登録してないぞ」

「じゃあ、お前は？」

「俺も無いな。ってか、自分で送れよ。俺たちに送らせようとするな」

「俺も登録してないから、こうやって頼んでるんだろ？」

「そう言われても、登録していない以上はメッセージを送ることはできないぞ」

「うーむ、仕方ない。周りの連中に聞いてみるか……………オーイ！誰かデインをフレンド登録している奴いないか！少し用があるから、仲介して欲しいんだが！」

「……………」

「おいおい、マジかよ……………」

「誰も登録してねえのか？」

と、こんな感じの会話が進み、攻略組の中に俺をフレンド登録している人はいないってことが分かった。そこへ、居合わせた名高い情報屋（攻略組から情報を仕入れるためにいた）が「お捜ししましよ」ということを言い、自分の情報網を駆使したが、結局、俺をフレンド登録している人は見つからなかった。

そんな経緯があつて、この異名が名付けられた。後日談としては、俺を勧誘しようとしたギルドリーダーは最前線の階層で待ち伏せて俺を勧誘するという古典的な方法を取ることになった。もちろん、断らせてもらった。

ちなみに、これら経緯はその情報屋から聞いたものだ。

自分の名前をひた隠しにしていた結果がこれだよ。
ハァ〜。

これからの方針としては、俺は第50層のボス攻略に参加する予定だ。

ただ、第50層のボス攻略において、多くの人間が死んでしまう。だから、少しでも戦死者は少なくしたいのが、俺の本音だ。しかし、俺1人の知識と力では、戦線崩壊は免れないだろう。

俺がヒースクリフのエクストラスキル《神聖剣》みたく大盾を持っているわけではないので、ボスの攻撃は防げない。いや、武器防衛スキルはあるから防げることには防げるのだが、攻撃ダメージを少し軽減するくらいだろう。普通のモンスターなら余裕で防げるのだが。

ならば、ボスの攻撃を避ければいい、という話になる。防御ができないのであれば回避だ。

この《SAO》は電腦世界。モンスターは実際の生物ではなく、プログラムの塊なので動きや攻撃はパターン化している。そうは思わせないのが現実感MAXである《SAO》の凄みなのだが。

だから、第50層のボスの動きをある程度まで把握すれば、攻略組とのボス攻略時にも少しは役立たせられると思う。

という訳で、午前2時。

プレイヤーの大多数が寝ている頃、俺は情報屋に公開された第50層のマップングデータを買い取り、そのデータを元にしてボス部屋の前に来ていた。

このマップングデータは、気前のいいプレイヤーが公開してくれた

もので、既にボス部屋の前までの道のりが記されていた。

恐らく、明日が本格的な第50層のボス攻略になる。

原作でも偵察はやらなかったのだろう。偵察などが行われていたのなら、戦線崩壊などという事態を招くわけがない。だから、偵察ができるのは、プレイヤーたちが寝静まったこの時しかない。本当は、偵察のために多数のプレイヤーを集めてやるのが良かったのだが、残念ながら、ソロの俺は攻略組の中でも地位はかなり低い。攻略組を牛耳っているのは《血盟騎士団》や《聖竜連合》といった攻略ギルドだ。ソロの俺が言っても、彼らは動いてくれない。ましてや「このままでは戦線が崩壊するので偵察をしましょう」などと説明できるわけもない。

つまり、俺1人で第50層のボスを偵察しなくてはならない。

俺は、今日この日のために、投槍スキルに使うアイアンランスに細工をしてきた。もしかしたら、気休め程度にしかならないかもしれない。問題なのがボス目の前にして、ウインドウを開いている時間がないということ。ソロで戦うため、ボスの攻撃対象は俺1人だ。ウインドウなんて開いてたら攻撃を喰らってしまう。移動しながらウインドウを開けばいいのだが、それは無理な話。ウインドウは立ち止まってやらなければならない。ウインドウを開かずアイテムを取り出すことができるアイテムポケット（アイテムストレージからアイテムを1種類だけ選択できる）にアイアンランスを入れたところだが、アイアンランスは武器カテゴリなので無理。それに今回はボスという難敵と戦うため緊急脱出用に転移クリスタルをセツトしてある（普通のプレイヤーでも緊急事態用に転移クリスタルを忍ばせている）。

あと、主要武器は両手槍だ。そして、万が一のときは、エクストラ

スキルを使うつもりだ。そのための武器もちゃんと用意している。こちらもうインドウを開いて装備しなければいけないので、あまりやりたくはない。あくまでも、両手槍スキルと投槍スキルで戦うつもりだ。

次に、ダメージを受けた時の回復は戦闘時回復任せだ。ポーションをいちいち取り出して居る時間は無い。

そして、ボス部屋の前に居る俺は、サチを助けるときと同じように、黒いフード付きのローブと白い仮面を付けて居る。万が一、他のプレイヤーが来たときに誰なのか分からなくするためだ。逃走用の服装と言ってもいい。

さらに、右手には全身黒塗りの両手槍ブラックレイム、左手にはアイアンランスを2本持っている。両手合わせて3本の両手槍を持つという明らかな筋力値任せなイレギュラー装備状態だ。理由は後々分かると思う。

俺はボス部屋の扉を足で開けた。両手塞がっているので、手では開けられない。

扉を開ける足にゆっくり力を入れていくと、勝手に扉が動き始めた。扉が完全に開き切ると、入口の近くから部屋の中央までボボボボボボ……と青い白い炎が等間隔で灯り、炎の道ができた。最後に一際大きな火柱が吹き上がると同時に、奥行きのある長方形の部屋が薄青い光で照らし出される。高さもそれなりにある。

部屋の中央にはボスが居た。肩から6本の腕から生え、頭の正面と両側面に顔があった。身体は金属のようなもので覆われているのか鈍く光っている。原作通りの多腕型のボスだ。しかも、座禅を組んでいた。まるで、誰かを待っているかのようなそんな雰囲気を感じ

「フオフオフオフオ

」

まだ笑い続けるアシュラの顔面に空から降ってきた2本のアイアンランスが直撃し、加えて、俺の両手槍から両手槍突撃技《スペース・ブレイク》がから空きの腹に突き出された。攻撃エフェクトの火花とアイアンランスのポリゴンが大量に散る。

容赦ない3点同時攻撃。さすがのボスでもこの攻撃には堪えたようで、アシュラの巨体がぐらりと揺れた。奴のHPバーが僅かながら減っている。

「呑気に笑っているからだよ」

狙いの3連コンボが決まったのに少し満足感を覚えた俺は追撃をせずに、後ろに跳んで、ウィンドウからまたアイアンランスを2本取り出し左手に持つ。

追撃を行えば追加ダメージを与えられるが、プレイヤー1人がソードスキルを放ったところでボスであるアシュラに『次の隙』ができるわけもない。だから、追撃を受けながらも有無も言わずに体勢を立て直し、こちらがソードスキルの硬直時間で苛まれているときにその6本の腕で攻撃をしてくるだろう。

それに、これは偵察。相手の出方を待つのもアリだ。え？最初に仕掛けたじゃないかって？……………座禅組んでるから寝てるかと思っただんだよ！よくあるだろ！お坊さんが座禅組んでて乱れた人を木の板（？）で叩くやつ！あんな感じのことをやったんだよ！

アシュラの笑い顔を埋めた攻撃エフェクトの火花とアイアンランスのポリゴンが晴れていき、そのムカつく笑顔が覗いた。本当に仏像のようでその笑顔は何も変わっていない。

「ッ……！」

突然、アシユラの首が90度回転して正面の顔が泣き顔に切り替わった。俺は泣き顔に切り替わったことに思わず身構えたが、何か攻撃が来ることはなくアシユラは後ろに大きく跳躍した。アシユラの金属製の裸足が地面を滑る。これにより、俺とアシユラの距離は充分に取られた。だが、この行動に俺は更なる緊張感を募らせた。

《SAO》には魔法がない。つまり、剣と己の力だけが頼りの世界だ。その世界の中で遠距離攻撃のできる方法は圧倒的に少ない。そのため、敵であるモンスターも自然と近距離で戦うやつが多い。これで遠距離攻撃ばっかやるモンスターが多かったら、どれほど鬼畜だろうか。だからと言って、全部が全部、近距離攻撃をするという訳もなく、必ず遠距離攻撃を得意とするモンスターがいる。そういうモンスターは自分の遠距離攻撃を当てるために、少なからず自分から距離を取るという習性を持っている。

アシユラが自分から距離を取った、ということは遠距離攻撃を仕掛けてくるという意味だ。本当なら距離を詰めるところだが、生憎と今からこの距離を詰めても狙い撃ちされるだけだ。それに、前述した通り、これは偵察。相手の出方を待つのが常套手段だ。

「ウワアアアアアアアア……………」！

アシユラが泣き声を出し始めた。子供が泣くような声だ。そして、泣き声を出しながら、両膝を折り体育座りするような格好になった。一体、何をやる気だ……………？

と思った次の瞬間、6本の腕が一斉に地面を抉り大きな土の塊が手の中に収められる。今度はそれを俺に向かって一斉に投げ付けてきた。

「ウワアアアアアアアア……………」！

「ちよ……………ッ！」

1 4 第50層 - 偵察開始 - (後書き)

まさかの第50層のボスは阿修羅。

最初は千手観音の予定だったのですが、手が多過ぎということであ
えなくボツ。

代わりに出てきたのが仏教の守護神でした。

ちなみに、本物の阿修羅の顔は三面ではありますが、その表情は喜・
悲・怒ではありませんので、悪しからず。

1 5 第50層 - 主神vs守護神 - (1) (前書き)

2話連続投稿、1話目

たぶん、槍はこんな使い方ができる……たぶん。

「ウワアアアアアアアア……………！」

「泣くな！鬱陶しい！」

アシユラが大量の土の塊を投げ付けてくる中、俺は悪態をつきながら土の塊を回避するべく、重荷となっている左手にある2本のアイアンランスを空中に向けて放る。もちろん、アシユラを狙った《グレイブ・レイン》だ。もし、この弾幕の中をアシユラを一直線に狙って投げたら、土の塊がアイアンランスと衝突する可能性が大いにあるからだ。ならば、上から狙うのが筋つてももの。予想通り、2本のアイアンランスは土の塊の弾幕の上空を通過していく。それに、2本のアイアンランスを持つ回避行動の妨げとなる。筋力パラメータがあるとは言え、両手に槍を3本も持っている、身体全体の重量が重くなり、本来のスピードを出せなくなる。ステップとか簡単な行動なら大丈夫だが。

そして、アイアンランスを放ることで身軽になった俺は両手槍であるブラックレイクイェムを両手に持ち、土の塊を回避するため足を動かした。一方、上空を飛んだアイアンランスは孤を描き、アシユラの顔面にぶつかると、泣き声を一瞬止めただけでこの弾幕を終わらせるまでには至らなかった。アシユラが放ってくる土の塊は、命中精度が悪い代わりに数が多い。点で投げってくるのではなく、面で投げってくるのだ。つまり、これを避ければ、あれに当たる、という質の悪い投げ方だ。しかも、土の塊が床に当たり飛び散るときの土にもダメージ判定があるらしく、避ける俺の足に当たってはじりじりとHPバーを減らしている。

「づぐッ！」

遂に、土の塊が俺に直撃。HPバーが2割ほど削られた。この攻撃力は油断できない。鎧装備ではないが、俺の防御力も攻略組の中でもそこそこある。それを2割も減らしたのだ。あと、4、5発当たれば間違いなくHPバーは全損。俺は死ぬ。アシユラは俺の動きが止まったことを感づいたのか、土の塊の弾幕が激しくなった。いや、死の恐怖を感じているからか。

「死ぬるものか………まだ原作は始まったばかりなんだ。こんなところで、死ぬるかよ！」

………この理由はないわー。でも、転生者なんだから仕方ないと思うんだ、うん。

俺は思考を切り替えて、武器防御スキルを発動。両手槍の真ん中を持って、槍全体を回転させる。槍が徐々に残像を持つようになり、やがて、槍が見えなくなるくらい的高速回転をするようになった。すると、全体が緑色のエフェクトを帯びた。武器回転防御技《ラウンド・シールド》。武器を回転させて盾のように使うことのできるスキルだ。『心の温度』でキリトが白竜のプレス相手にやっていたスキルだ。そして、高速回転する槍に土の塊がぶつかるが砕け散った。HPバーを見てみるが、まだ戦闘時回復の許容範囲内バトルヒーリング。でも、あと2発は受ければ許容範囲外だ。さらに悪いことに、アシユラの攻撃範囲が徐々に狭まってきている。縦ではなく横にだ。俺が止まっているせいなのか、段々とのめを絞ってきている。完全な目測みたいなものだが間違いないだろう。これでは、武器防御スキルを発動する意味がない。ただのじり貧だ。

俺は舌打ちすると横を見た。一瞬だけ、土の塊が少なくなったのを見定めると《ラウンド・シールド》を解除して一気に駆け出した。頭のすぐ横を土の塊が通り過ぎる。土の塊が2、3発当たりそうになったが、これは避けて、土の塊の弾幕を抜けた。これで安心など

できるはずもなく、アシユラはすぐに射的範囲を修正して俺を弾幕の範囲に入れようとするだろう。

今のアシユラの攻撃は十分に脅威的だ。1つ1つの土の塊が攻略組プレイヤーのHPを2割も削るほどの攻撃力を持つ。一瞬でもパニックになつてしまえば、4、5発なんてあつという間だろう。冷静に対応しなければ、間違いなく死ぬ。

今からアシユラに近付いて攻撃をする。このままでは、いつか俺の方がくたばるのが目に見えているからだ。弾幕から抜け出した俺は斜め前の方向に走った。斜め前を走るのは、アシユラの投げる向きを俺に合わせて修正されにくくされるためとできるだけアシユラに近付くためだ。

しかし、そんな小細工はアシユラは数秒で破られてしまう。走る俺の前方から土の塊の弾幕が襲ってきた。俺とアシユラの距離は10m……………イケる！

「せいッ！」

俺は槍の末端を持つと、槍を前方の地面に突き立てるように刺して、膝をバネのように折り曲げ地面を蹴った。俺の身体は地面を離れ、槍を支えにして弾幕の上空へと上がった。棒高跳びのように。弾幕が俺の下を通過していく。唯一、槍に当たらないか不安はあったが、当たらなかつたようだ。空中に踊り出た俺は槍を引き寄せた。これで、土の塊が槍に当たる心配はない。あとは、身体が真っ直ぐアシユラの元まで行く。アシユラの方は、突然、俺が空中に出たのに驚いたのか、的を修正するまでにさっきよりも時間がかかった。それでも数秒なのだが、空中からアシユラを狙うには十分な時間だった。身体が頂点に達し下降し始めた。少し下降したところで、アシユラとの距離は槍が届くくらいまでに狭まった。

俺は空中で身体に捻りを加えて、両手槍回転技《ラウンド・スター》を放った。回転していた俺の身体が高速回転をし始め、アシユラ

の頭から足までを何回も切り裂いた。俺が空中にいる間ずっと。

「ウワアアアアアアアアアア……………!!」

アシユラの6本の腕が止まった。

俺は地面に着地すると、すぐにその場を後ろに跳んだ。その直後に、ズドンッ!と俺がさつき着地していた場所に拳が突き刺さる。攻撃の余韻として地面の細かい破片が飛び散った。たぶん、あれら破片もダメージ判定があるのだろう。

「グオオオオオオオオオオ……………!!」

アシユラの顔が怒り顔になっていた。さつき空中で斬っている途中で、顔が180度回転して攻撃パターンが変わったのが見えていた。心なしか、口から煙みたいなのが出る。

恐らく、今度は近接攻撃型。拳を使っていたし、6本の腕を使って
ッ!

1 5 第50層 - 主神vs守護神 - (2) (前書き)

2話連続投稿、2話目

神々の戦い(笑)はまだ続きます。

アイテムを設定した。

「グオオオオオオオオオオ………!!」

雄叫びを上げるアシユラがこっちに向かって突進してきた。ドンドンという足音が聞こえてくる。

くそ………!間に合え………ッ!!

スキルウィンドウを開いて選択している武器スキルを変更。最後にOKボタンを押してウィンドウを消す。ここまで、かかった時間は約4秒。うん、宿で練習した甲斐があったな。やっぱり、ソロでボス相手だとこのくらいの時間が限界か。

そして、左手に重みを感じたと同時に振り向き、俺に迫っていた拳を2本の槍で弾き^{バリイ}した。完璧に弾き^{バリイ}したため、HPバーの減少はしていない。すぐに次の拳を迫ってきたが、これも弾き^{バリイ}した。2つの拳を弾き返されたことで相手の態勢を崩す。アシユラがよろめいたところで2本の槍を携えて攻撃のラッシュ。

エクストラスキル《二槍流》

これが、デスゲーム開始直後にあった武器スキル。名前からも分かる通り、2本の槍を両手に持つことで発動する武器スキルだ。まあ、名前からエクストラスキルと判断したのは「《二刀流》がエクストラスキルなら《二槍流》もそうなんじゃね?」という単純思考だったりする。さらに、デスゲーム開始直後からあったため、その熟練度は800近くまで達している。逆に両手槍スキルの方は700ちよつと二槍流スキルよりも少し低い。この調子なら1年後のゲームクリア時までに《完全習得^{コンプリート}》はできるだろう。他のスキルも同様に。

「グオオオオオオオオオオ………!!」

ともしなかった。

もし、溜めではないとしたら何だ？……………思い付くことはない。情けないな！。

とりあえず、奴が動かない間に回復しとくか。ウィンドウからポーションを取り出しグイツと飲み干す。《SAO》の回復アイテムは即効性ではなく徐々に回復する仕様になっているため、俺のHPが全快になるのは数分先だ。

「フオフオフオフオフオ……………」

相変わらずアシュラの笑い声は続いている。鬱陶しい笑い声だ、と座禅を組むアシュラを睨み付ける。自然と視界にアシュラの7割を示すHPバーが入った。

さつき、半分近くまで減ってなかったか……………？

そのとき、見ていたアシュラのHPバーがキュイと伸びた。ダツ！と俺は両手の槍を握り締めて走り出した。

HPバーが伸びた　つまり、アシュラのHPが回復しているということだ。これでは振り出しだ。戦い始めた、最初の時に。回復を中断させるには、攻撃するしか方法は思い付かない。

座禅を組むアシュラまで、あと5mというところで、手を組んでいない他の4本が動いた。腕を高く伸ばし、そして、両手を打ち合わせた。パアアンツ！と拍手とは違う何か質量ある物がものすごい力で衝突し合ったような轟音が俺の耳に入った。すると、この音の発信源である4つの手から空気の波紋が周囲に撒き散らされた。普通、空気の波紋は見えないが、この時は見えた。その波が俺の身体を通過する瞬間、

「ぐがッ!？」

前触れもなく身体が吹き飛ばされ、数mほど身体が地面に打たれた。

何とか起き上がり、HPバーを見てみるとレッドゾーンギリギリまで削られていた。ふと心配になって、両手を確認してみると、ちゃんと2本の槍が握られていた。無意識に強く握っていたらしい。今のは衝撃波か……？

周囲10mに衝撃波を撒き散らすなど、見たことがない。たぶん、プレイヤーがある程度の距離まで近付くと、あの衝撃波を出すのだろう。あんな強烈な衝撃波を防ぐには盾装備が何人か欲しいところだ。全く以って、酷い攻撃だ。

さて、アシユラのHPは9割まで回復している。自分の所業を無駄にされた感が否めないが、そこは割り切るしかない。対して、俺のHPは3割弱。さつき、ポーションを飲んだので5割近くまで回復するはずだが、どう考えてもアシユラが全快するのが早い。つまり、絶対的な不利な状況だ。

「ハアアアア………」

俺は大きく溜め息を付いた。

偵察もここまでか。大まかに分けると、攻撃パターンは3つ。いずれも顔が切り替わるのに合わせて攻撃パターンが変化。笑い顔が回復、泣き顔が遠距離、怒り顔が近距離、と三者三様の攻撃パターンだ。もちろんのことながら、こんな攻撃パターンを持つのはアシユラ以外に知らない。これをヒースクリフは独力で戦ったというのだから信じられない。タフ過ぎるだろう。

思考を打ち切ると、アイテムポケットから、転移クリスタルを取り出した。

「転移！アルゲード！」

沢山の鈴の音を鳴らすような美しい音色と共に、手の中で結晶が碎く散った。同時に俺の身体は青い光に包まれた。

明日は、第50層のボス攻略か……。

あ、そういや、結局、毒らせられなかったな。4本しか投げてないから仕方ないか。

うん？何の話かって？

アイアンランスに毒を塗っただけですけど何か？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9752z/>

《ソードアート・オンライン》-転生した主神(笑)-

2012年1月6日06時48分発行